中国東北部（旧満州）を訪ねたオヤジたちの9日間

～大連・丹東・瀋陽・撫順・長春・ハルビン、夜行列車～

□ はじめに

「満州（Mǎnzhōu）」…日本人にとっても中国人にとっても、その言葉の背景には独特の残響があります。

西欧列強の覇権とアジア諸国の命運、巨大な力に翻弄される国家と市民の禍福のあざないが、歴史の深い亀裂の底に浸透しているせいでしょうか。

今回の旅を企画した二木氏と坂元氏は、この地域を今後の日中関係を考える際に外すことのできない“空白地帯”であると指摘しました。アジア近現代史に精通した新聞記者出身の彼らと飲食や入浴を共にし議論を重ねた9日間は、私の人生にとってかけがえのないものでした。

□ 都市と歴史的建造物

大連の街は、清々しい雰囲気でした。街の中心にある円形の広場を取り巻く道路沿いに、100年前に建てられたバロック様式の建築が並んでいます。

ホテルは大連賓館（ヤマトホテル）を改装した建物。巨大なシャンデリアと王宮のような内装がリュックを担いだ私たちを迎えてくれました。

このあと訪れる東北部の中心都市「瀋陽（奉天）」、旧満州国の首都「長春（新京）」、黒竜江省の省都「ハルビン」にも同様に多くの歴史的建造物が残され、文化財として保存されています。

これら荘厳な建築物は、帝政ロシア、清朝、大日本帝国が覇権と存亡をかけてせめぎ合った歴史の重みを秘めています。満州には巨額の国家財政が投じられ、民間資本も押し寄せました。史上稀にみる都市建設が行われたはずです。その名残が“実際にあったこと”として語りかけてきます。

□ 歴史と戦跡

旧満州地域と日本との関わりは、1905年のポーツマス条約によりロシア帝国から東清鉄道と炭鉱の権益を得たことにはじまります。その後、辛亥革命、第一次大戦、張作霖爆殺事件、1931年の柳条湖事件を経て満州事変が勃発、32年の「満州国」建国として結実します。深刻な不況にあった日本にとって「満州」は輝けるフロンティアでした。往時150万人の日本人が入植し、30万人の軍隊を派遣するに至ります。

その陰で抗日戦線が拡大し、衝突と鎮圧が生じます。ここで語るのは控えますが、「9・18歴史博物館（柳条湖事件）」「撫順戦犯管理所」「平頂山歴史記念館」「偽皇宮」「731部隊旧址」など、歴史の遺構をたどるたびに重苦しい気分が鬱積し、旅の終わりに近づくにつれ眠れない夜を迎えることになります。

▲大連駅にて

▲731部隊旧址にて

□ まとめ

延々とトウモロコシ畑が広がる東北地区。中国人たちは几帳面で気配りがよく、常に居心地のよさを感じさせてくれました。その半面、ときにタクシー運転手や店員の日本人に対する侮蔑に触れて、心の闇を感じさせられることもありました。

戦争博物館の展示は、私たちには衝撃的なものばかりです。しかし、その出口には中国政府のコメントが必ず添えられています。“わたしたちは歴史を鏡とし、互いにその反省に立って両国の新しい未来を築いていきましょう”

企業の歴史もまた、それを取り巻く人間の歴史です。大きな力の前に翻弄される中小企業の経営は、だからこそ100年先の未来を見据えた確かな精神を必要とすることを思いました。

（同行者）五光（株）　二木　崇
坂元鋼材（株）　坂元　正三
（文責）川本工業（株）　中野　幹生

大連賓館には、会員企業の法円坂法律事務所大連事務所があります。駐在の夏目先生には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。